

第5章

客観的な根拠を重視した 教育政策（EBPM）の推進

- ・ 倉吉市教育委員会
- ・ 倉吉市立西中学校
- ・ 岩美町
- ・ 岩美町立岩美北小学校

県教育委員会と倉吉市教育委員会及び岩美町教育委員会が共同で行っている実証研究の取組を紹介します。



客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM[※]）の推進について

とっとり学力・学習状況調査を実施して3年目を迎え、個人又は集団における学力の状況、学力を支える力である学習方略や非認知能力を経年で調査することで、学力レベルの伸びや非認知能力等の変化を見ることができるなど、この調査結果から多くのデータを得ることができるようになった。伸びに着目した取組に加え、今年度からは、伸びそのものの変化（伸びの伸び）も見取ることができるようになっている。ここで得られたデータをエビデンス（客観的な根拠）として活用し、教育政策に生かすことで、よりよい教育実践ができると考えている。しかし、教育データの活用については、全国的にも先行事例が少ないため、県教育委員会と倉吉市教育委員会及び岩美町教育委員会とが連携し、市町の学校のデータを基に共同で実証研究を行い、そこで得られた成果や好事例を県内の学校に発信していくこととし、令和4年度から取組を進めている。

EBPMを推進することで、次の3つのような効果を期待している。

- ①優れた教師の経験や勘、そして匠の指導技術を、言語化・可視化・定量化するなどして、若手教師に効率的・効果的に伝承することができる。
- ②データによるエビデンスと教師の経験や勘を融合し、より効果の高い教育実践が行うことができる。
- ③今まで良いとされている取組、常識だと思われる取組について、その効果を検証することで、エビデンスに基づいたスクラップアンドビルドを推し進めることができる。

この3つの視点を持ちながら、指導・支援の在り方の見直しや校内研究等の効果検証を行い、次年度以降の教育政策に生かすことで、この調査結果をエビデンスとした効果の高い教育を推進したいと考えている。

今年度、倉吉市教育委員会や岩美町教育委員会と県教育委員会、そして地方教育アドバイザーが一丸となって進めてきた実証研究について、今まで取り組んできたことや協議してきたこと、そして、得られた知見をまとめた。

※EBPM：Evidence Based Policy Making の略称で、エビデンスに基づき、より実効性の高い政策を立案すること

1 研究推進の方法

- (1) 市町教育委員会と県教育委員会で実証研究チームを構成する。
- (2) テーマを設定する。
- (3) とっとり学力・学習状況調査の調査結果を分析し、調査する学校、学級を選定する。
- (4) 学校を複数回訪問し、聞き取り調査等を行う。
- (5) 調査内容をまとめる。
- (6) とっとり学力・学習状況調査報告書に調査結果を掲載して周知を図る。

2 研究のサポート

文部科学省地方教育アドバイザーから、データ分析の意義や方法、教育政策の検証等について指導・助言を受ける。

◇地方教育アドバイザー（以下、地教AD）

文部科学省高等教育局国立大学法人支援課 企画官 大江 耕太郎 氏
文部科学省研究振興局参事官（情報担当）付企画係長 大井 康平 氏（～R5.9）
文部科学省初等中等教育局教育課程課 審議・調整係長 槍澤 芽衣 氏（R5.9～）

3 学校の教育効果を図る視点

以下の3点に着目し、分析を進める。

- (1) 学力が伸びた児童生徒の割合・学力レベルの伸び
- (2) 非認知能力、学習方略
- (3) 児童生徒の学力が伸びた学級の割合

客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進 【倉吉市教育委員会の取組】

1 はじめに

教育データを効果的に活用した教育施策を推進していくために、令和4年度より、倉吉市教育委員会と県教育委員会は、倉吉市内の学校のデータを基に共同で実証研究を行い、そこで得られた成果や好事例を県内の学校に発信することとしている。

2 研究テーマ

- ・小学校において、中学校でも学力を伸ばすための指導のポイントは何か。
（どのような指導が中学校で学力を伸ばし続けることにつながるか。）
- ・中学校において、学力を伸ばす学級経営・学年経営のポイントは何か。※学年主任の役割
（どのような学級経営・学年経営が学力を伸ばし続けることにつながるか。）

3 具体的取組の実際

(1) 倉吉市立小・中学校全校訪問について

倉吉市教育委員会と県教育委員会が倉吉市内の全学校の結果を把握し、各学校におけるとっとり学力・学習状況調査の結果活用状況や学校経営にどう生かしていくかについて各学校管理職及び担当者、倉吉市教育委員会、県教育委員会で協議した。

(2) とっとり学力・学習状況調査倉吉市プロジェクトについて

とっとり学力・学習状況調査の結果を活用した学校マネジメントについて、プロジェクトメンバーを中心に共同研究を進めることをとおして、とっとり学力・学習状況調査の学校マネジメントの資源としての可能性を探るとともに、その進捗状況及び成果等を普及し、各学校におけるマネジメント能力向上を目指すためプロジェクトを立ち上げた。

○倉吉市立成徳小学校

「学校マネジメントへの活用」

- ・児童の伸びについて追跡調査を行いながら、講じた教育施策の効果検証を行う。
- ・校内研究等の学校における教育施策の指標、改善の根拠とする。
- ・教職員の人材育成を図るために活用する。

○倉吉市立西中学校

「中学校における活用に係る好事例の創出」

- ・学年会議において、分析シート（学校用3）を活用し、学力を伸ばした生徒の特徴や教師の学力を伸ばしたと考えられる手立てについて協議した。
- ・不登校対策についての協議（「水曜会議」）において、帳票40を活用し、気になる生徒への手立てについて協議する。
- ・校内研究において、授業の質と非認知能力の向上を図るための視点や研究指標として活用する。

(3) スケジュール

| 日にち | 内容 | 参加者 |
|---------------|--|---------------------------------|
| 4月24日 (月) | 第1回チーム会議 ・現状についての情報共有 ・研究についての協議 | ・市教委 ・県教委 ・地方教育アドバイザー |
| 6月27日 (火) | 第2回チーム会議兼地方教育アドバイザーによる市教委及び学校訪問 ・倉吉市教育委員会への訪問 教育長との面談等 ・成徳小学校への訪問 校長面談等 | ・市教委 ・県教委 ・地方教育アドバイザー ・学校 |
| 10月4日 (水) | 第3回チーム会議 ・調査結果分析① ・全校訪問についての協議① | ・市教委 ・県教委 |
| 10月12日 (木) | 第4回チーム会議 ・調査結果分析② ・全校訪問についての協議② | ・市教委 ・県教委 |

| | | |
|--------------------------------|--|---------------------------------|
| 10月26日 (木) | 第5回チーム会議兼地方教育アドバイザーによる市教委及び学校訪問 ・倉吉市教育委員会への訪問 取組について協議 | ・市教委 ・県教委 ・地方教育アドバイザー ・学校 |
| 10月30日 (月) | 第6回チーム会議 ・調査結果分析③ ・全校訪問についての協議③ ・とっとり学力・学習状況調査活用プロジェクトについて協議 | ・市教委 ・県教委 |
| 11月2日 (木)～ 12月21日 (木) | 倉吉市立小・中学校全校訪問 ・とっとり学力・学習状況調査の活用について協議 | ・市教委 ・県教委 ・学校 |
| 12月13日 (水) | 第7回チーム会議 ・とっとり学力・学習状況調査活用倉吉市プロジェクトについて協議 | ・市教委 ・県教委 |
| 12月19日 (火) | とっとり学力・学習状況調査活用倉吉市プロジェクト（以下：とっとり学調倉吉市P）キックオフミーティング ・現状について情報共有 ・取組について協議 | ・市教委 ・県教委 ・学校 |
| 1月10日 (水) | とっとり学調倉吉市Pミーティング（西中）① ・現状について情報共有 ・取組について協議 | ・市教委 ・県教委 ・学校 |
| 1月12日 (金) | とっとり学調倉吉市Pミーティング（成徳小）① ・現状についての情報共有 ・取組について協議 | ・市教委 ・県教委 ・学校 |
| 2月9日 (金) | とっとり学調倉吉市Pミーティング（西中）② ・実践についての情報共有 ・取組について協議 | ・市教委 ・県教委 ・学校 |
| 3月19日 (火) | とっとり学調倉吉市Pミーティング（成徳小）② ・実践についての情報共有 ・取組について協議 | ・市教委 ・県教委 ・学校 |
| 3月21日 (木) | とっとり学調倉吉市Pミーティング（西中）③ ・実践についての情報共有 ・取組について協議 | ・市教委 ・県教委 ・学校 |
| 3月 | 第8回チーム会議兼地方教育アドバイザーによる市教委及び学校訪問（予定） | ・市教委 ・県教委 ・地方教育アドバイザー |

4 成果と課題

(1) 成果

- 地方教育アドバイザー、倉吉市教育委員会、鳥取県教育委員会が連携し、各学校を訪問することで、とっとり学力・学習状況調査の意義が浸透し、授業改善や校内研究等への活用の意識がさらに高まっている。
- 倉吉市教育委員会と鳥取県教育委員会が共同で調査結果を分析することで、客観的に学校の状況を把握することができ、学校訪問の際に根拠をもとに学校と協議することにつながった。
- プロジェクトを立ち上げ、学校の取組について倉吉市教育委員会と鳥取県教育委員会が協働して考え、サポートすることで、次ページ以降で紹介する倉吉市立西中学校の取組に見られるようなとっとり学力・学習状況調査の調査結果の効果的活用につながった。

(2) 課題

- とっとり学力・学習状況調査は、年に1回の調査であることから、分析するだけの十分なデータとは言えない。そこで、学校への聞き取りや訪問をとおして、2で取り上げた研究テーマについての分析をさらに進め、研究結果やそこで得られた知見を周知することで、教育施策の立案や改善に活用できるようにしていきたい。

客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進
【「とっとり学力・学習状況調査倉吉市プロジェクト」－倉吉市立西中学校の事例】

1 はじめに

本プロジェクトでは、とっとり学力・学習状況調査（以下、とっとり学調）のデータをどのように学校経営へ活用していくかということについて、方向性や取組を模索している。具体的な取組や検証について、倉吉市立西中学校の取組の概要を紹介する。西中学校では、とっとり学調のデータから生徒の伸びの状況や特徴的な傾向を把握し、伸びの要因等について分析・考察を行っている。そして、目指す学校像の実現に向けて分析したデータ結果を活用し、今後の方向性や具体的な施策につなげていこうと取り組んでいる。

2 目指す学校像

「学力と人間力を育て、人として成長する学校」

○人間力へのアプローチ、人間力を育てることが学力の伸びにもつながっていくという仮説をもって学校経営が行われており、その仮説を実証していくために、とっとり学調のデータを駆使していく。「人間力を育てる」とは、換言すれば生徒の「非認知能力を育てる」ということでもあるため、とっとり学調で“学力を支えるもの”として捉える「非認知能力」「学習方略」の伸びや状況は、特に注目すべきポイントとなる。学力の伸びとの相関を捉えたり、学校経営による効果測定を行ったりして、仮説を実証していく。

3 伸びの状況分析－令和5年度調査結果（各帳票）より

○県平均と比べて、学校全体として学力を伸ばした生徒の割合が高い。※西中全体：66.1%（県：52.8%）
 ○『規律ある態度』【帳票05】の達成率において、全学年で7項目中6項目で85%以上である。
 【以下は、特に3年生に関しての特徴的な傾向】
 ○国語・数学両教科とも、県平均と比べて学力を伸ばした生徒の割合が高い。【帳票40, 42】
 ※国語：63.2%（県：55.8%）、数学：75.0%（県：68.1%）
 ○学習方略・非認知能力において、7項目中6項目で伸びが見られた。（特に自己効力感が+0.4）
 ○非認知能力（自己効力感・向社会的）の値が全体的に高い数値を示している。
 ○各学力階層の伸び【帳票26】（数学）において、どの学力階層も3年間通じて伸びている。
 ≪分析支援プログラム【帳票11】を活用した分析より≫
 ・質問項目「あなたの学級は、いろいろな活動にまともって取り組んでいたと思いますか。」と「学力階層__国語」との相関 ⇒2年生国語：肯定的評価 93.2%
 ・質問項目「学校の先生は、自分たちのよいところを認めてくれましたか。」と「学力階層__数学」との相関 ⇒3年生数学：肯定的評価 97.1%（「認めてくれなかった」と回答した生徒は0人）
 ・質問項目「先生は、授業やテストで理解していないところや、間違えたところについて、わかるまで教えてくれましたか。」と「学力階層__数学」との相関 ⇒3年生数学：肯定的評価 93.2%



4 なぜ学力が伸びたと考えられるのか（考察）

・**凡事徹底・『型』を身に付ける指導**で生徒の生活が落ち着き、**学習に集中できる環境が整った**。
 ・**つながりと感動のある学校行事等**を通して生徒の主体性や自己肯定感が高まり、**人間力の育成が学力の伸びにつながった**。
 ・**不登校対策の日（水曜会議）の積み重ね**により、**教員の意識や生徒の見方、接し方が変わり、新規不登校数の減少につながった**。

5 どんな取組が生徒を伸ばした（何が影響した）と考えられるのか —4つの具体的な取組

①『人間力』を育てる取組
 ・凡事徹底：学校生活の「型」を身に付ける指導をあらゆる場面で徹底する。
 ※「時を守り、場を清め、礼を正す」に表される「守・破・離」の精神で、3年間を見通して生活スキルのステップアップを図る。
 ・つながりと感動のある学校行事と主体的な生徒会活動を通して人間性を高める。

②学力向上の取組



- ・「西中めざす授業の姿（10の視点）」を基にした協同学習を実施し、学力を伸ばす。
- ・地域と連携した取組を実施し、「開かれた学校」を実現する。



「Nishi スタ」
地域の方による学校・授業
サポート



高校生による学習サポート
「自主学習 Day」
近隣地元高校生による学
習支援（年5回）

西中めざす授業の姿（10の視点）

- ①【興味関心】を引き出す導入の工夫
- ②生徒への【本時の流れ】の提示
- ③学びたい【学習課題】の提示
- ④学習課題を【めあて】として提示
- ⑤明確な表紙での【評価基準】の提示
- ⑥【学習規律】（ツリハリ）の徹底
- ⑦生徒の学びが深まる【ICT】の活用
- ⑧【個人での思考場面】の設定
- ⑨【協働的に課題を解決する活動】の設定
- ⑩成果を確認し次の意欲を高める【振り返り】の実施

**主体的・対話的で
深い学びの実現**

③不登校対策の取組

- ・不登校対策の日（「水曜会議」）を毎週水曜日の放課後に実施し、生徒理解と具体的な方策について話し合う。
- ・校内サポート教室（県事業活用・4年目）と「相談室」を効果的に活用し、不登校生徒支援を実施する。

④人権教育の取組

- ・生徒の良いところを伝え合う「スマイルカード」の取組で、生徒の自己肯定感を高める。
- ・教員の『生徒のよいところを認め、寄り添い、一人ひとりを大切にする』指導を通して、生徒との信頼関係の醸成と問題行動の未然防止を図る。



6 今後さらに学力を伸ばしていくために（今後の取組の方向性）

①授業改善

- ・教師主導による一斉指導からの脱却を目指す。→ 生徒が主体となり、かかわり合い、生徒が自ら学ぶ授業へ
- ・協同学習の理念のもと、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。

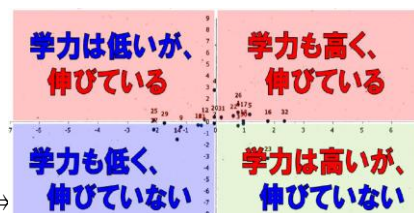
②「水曜会議」で個票を効果的に活用

不登校対策として毎週水曜日に各学年団で行っているこの取組の中で、【帳票40】「学力分析データ（学力のレベル・伸び・学習方略・非認知）児童生徒別」を活用して各生徒の状況を把握するアセスメント的活用の可能性について提案する。

③伸びている生徒の傾向をつかむこと

1月に実施された職員研修の際、【学校分析シート】「今年度の学習状況（学力の伸びと学力値）【※】」を活用して、以下の2点について各学年団による分析・考察が行われた。

- (i) 学力が伸びている生徒の傾向にはどんな特徴があるか。
(特に、学力は低い伸びている生徒は、どういう生徒か。)
 - (ii) 教師は、その生徒にどういうアプローチをしたか。



※プロット図を基にした分析 ⇒

ここで得られた情報をもとに、「伸び」に着目したさらなる仮説検証のサイクルが今後動き出していくことになる。

7 終わりに

特に3年生の伸びに着目していくと、中学校3年間の取組の効果を裏付けるようなデータとなっていることがうかがえた。現学年団の3年間の取組内容について、何が効果があったかを教員自身の振り返りから明らかにし、焦点化して捉えることで、学校全体の財産として共有することも今後行われていく。

本プロジェクトを通して今後さらにデータの蓄積と仮説検証を進めていくことで、中学校の取組と人間力の育ち、そして学力の伸びとのつながり等の知見を明らかにしていくことができるだろう。

客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進
【岩美町の取組】

1 令和5年度の戦略会議で挙げた研究テーマの内容

- ・児童生徒の「学力の伸び」の違いには、何が関係しているのか。
 - ・非認知能力、学習方略を高めるためには、何に重点をおいて指導していくとよいのか。
 - ・どのような教育施策が、伸び続ける児童生徒の育成に効果があるのか。
 - ・「10才の春、15才の春」に向けて小中連携で何に取り組んでいけばよいのか。
- ※このような視点をもって、推進チーム会議で協議し、学校訪問を行った。

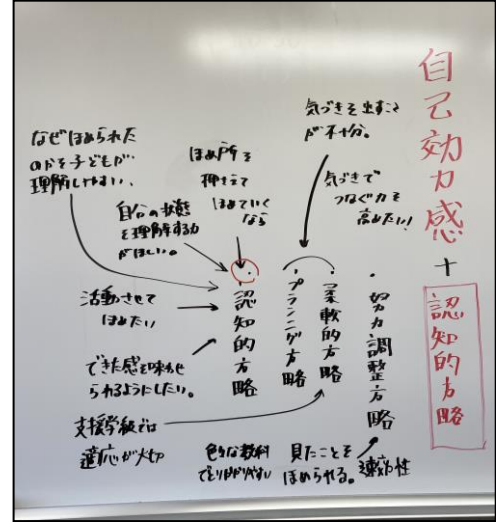
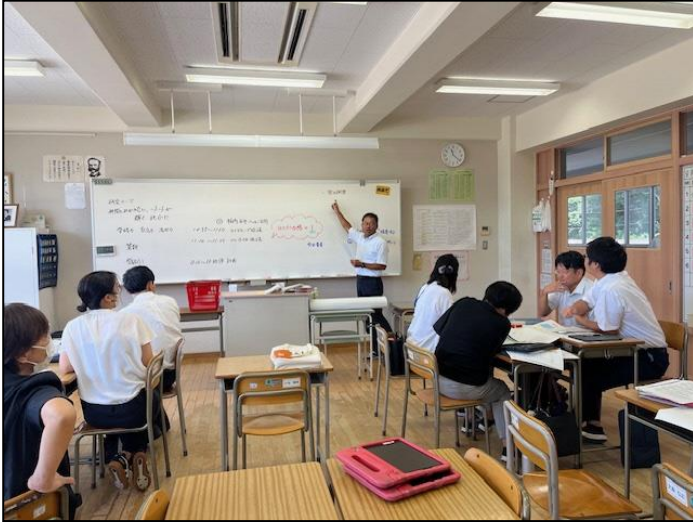
2 具体的取組の記録

(1) スケジュール

| 日にち | 内容 | 参加者 |
|-----------|---|-----------------------------|
| 4月13日（木） | 第1回戦略会議 ・趣旨説明 ・現状についての情報共有 ・研究についての協議 | ・町教委 ・県教委 |
| 5月1日（月） | 第1回チーム会議 ・趣旨説明 ・現状についての情報共有 ・研究についての協議 | ・町教委 ・県教委 ・学校 |
| 6月26日（月） | 第2回戦略会議兼地方教育アドバイザーによる町教委及び学校訪問 ・岩美町教育委員会への訪問 教育長との面談等 ・岩美西小学校への訪問 校長面談、授業参観等 | ・町教委 ・県教委 ・地方教育アドバイザー |
| 7月5日（水） | 第3回戦略会議 ・研修会についての協議 | ・町教委 ・県教委 |
| 8月1日（火） | 令和5年度岩美町教育研究会研修会 | ・町教委 ・県教委 ・学校 |
| 10月11日（水） | 第4回戦略会議 ・全国学力・学習状況調査結果分析 ・第2回チーム会議について | ・町教委 ・県教委 |
| 10月12日（木） | 第2回チーム会議 ・とっとり学力・学習状況調査結果分析 | ・町教委 ・県教委 ・学校 |
| 10月25日（水） | 第5回戦略会議兼地方教育アドバイザーによる町教委及び学校訪問 ・岩美南小学校への訪問 校長面談、授業参観等 ・岩美町教育委員会への訪問 取組について協議 | ・町教委 ・県教委 ・地方教育アドバイザー |
| 2月 | 第6回戦略会議兼地方教育アドバイザーによる町教委及び学校訪問（予定） | ・町教委 ・県教委 ・地方教育アドバイザー |
| 3月 | 第7回戦略会議（予定） | ・町教委 ・県教委 |

(2) 岩美町教育研究会研修会について

岩美町内の全小・中学校合同で、とっとり学力・学習状況調査の活用について研修会を実施した。全体研修会でとっとり学力・学習状況調査の意義や仕組み等について帳票40を使った演習を含めた理論研修を行った。その後、学校ごとに令和4年度の調査結果を基に、校内研究との関係について捉え、校内研究の指標づくりを行った。なお、岩美町全体の指標として、「自己効力感」を設定した。



(3) 岩美町チーム会議の取組

①各学校長との協議

鳥取県教育委員会からのとっとり学力・学習状況調査についての説明後、とっとり学力・学習状況調査の活用や現状について意見交換を行い、研究テーマとして「10才の春、15才の春を意識した小中連携」、「伸び続ける児童生徒の育成」について協議を行った。

②とっとり学力・学習状況調査の分析

令和5年度の調査結果をもとに、各学校の結果につながったと考えられる取組や、今後の取組の方向性について意見交換を行った。

3 成果と課題

(1) 成果

○鳥取県教育委員会と岩美町教育委員会がチームとなり、調査結果の分析することで、課題を共有し、その対策について協議することができた。こうした定期的に行う戦略会議において、学校の状況について見取りだけでなく調査データをもとに協議することで、客観的に学校の状況を把握することができた。

○小学校と中学校がそれぞれ持っているデータを共有し分析することで、中学校区の児童生徒がどのように学力レベルを伸ばしているか等を見取ることができた。このように、小中連携を行うときの資料の1つとしてとっとり学力・学習状況調査の結果を共有することで、中学校区内の小中連携を充実させることができると考える。

(2) 課題

○とっとり学力・学習状況調査の結果の活用について、学校の担当者や教科担当のみの取組とならないよう、また、校内研究の成果指標等に活用するよう、引き続き、周知を図る必要がある。

○県、町教育委員会や学校の分析だけでなく、大学等と連携したアカデミックな分析を基に、どのような児童生徒が伸びているのか、どのような教育施策が児童生徒を伸ばしているのかについて知見を創出していくことが、今後の教育に必要であると考えられる。

とっとり学力・学習状況調査の調査結果のデータ活用方法

～岩美町立岩美北小学校～

1 校内研修資料

とっとり学力・学習状況調査実施3年目となり、昨年度の校内分析研修後、より一層の効率的かつ効果的なデータの活用方法を検討するため、本校職員を中心に、とっとり学力・学習状況調査活用方法についてのインタビュー調査を行った。調査を通して、①全国学力・学習状況調査等、各他調査との関連が意識できるようになると良い。②学校の取組や、自身の指導の振り返りのためにも卒業生の結果が詳しく知りたい。③どのような問題につまずいているのかわかると具体的な指導方法を考えやすい。という3つの課題があることがわかった。そこで、今年度の校内分析研修会においては、その課題の改善を意識して資料作成を行い実施した。以下に実際に使用した資料を紹介する。なお、図の数値は県の結果以外はすべて架空の数値である。

①帳票40の活用

昨年度に続き、帳票40に i-check の結果を加えた。さらに今年度は、就学前のデータ（引継ぎデータの特に配慮が必要だと思われる児童）、本校の取組である靴そろえの結果、さらに6年生に関しては、今年度の全国学力・学習状況調査の国語、算数それぞれの四分位の結果を加えた資料作成（図1参照）し、研修を行った。



図1 帳票40加工資料

②中学1年生（本校卒業生）の状況把握

本校児童の多くの進学先である岩美中学校から昨年度卒業生のデータ提供にご協力いただき、令和4年度本校卒業生の資料（図2参照）を作成した。中学1年生の結果においても主体的・対話的で深い学びの実施の数値が高かったことから、その要因と考えられる北小スタンダード（算数科における児童主体の授業の流れ）の継続、徹底、さらなる発展に向けて取り組んでいくことを全職員で共通理解した。

個人番号を基に岩美北小学校出身生徒を抽出し作成

| 国籍 | | 算数・数学 | | R4→R5(変化量) | | | | | | | | | | R5結果 | | | | | | | | | | |
|-------|-------------|-------|-------------|-----------------|-------|----------|------|-------|--------|------------|----------|-------|----------|------|-----------------|-------|--------|-------|-----|-----|-------|-----|-----|-----|
| R5レベル | 昨年度からの学力の伸び | R5レベル | 昨年度からの学力の伸び | 主体的・対話的で深い学びの実施 | 学習方略 | | | | | 非認知能力 | | | | | 主体的・対話的で深い学びの実施 | 学習方略 | | | | | 非認知能力 | | | |
| | | | | | 柔軟的方略 | プランニング方略 | 作業方略 | 認知的方略 | 努力調整方略 | 自己効力感(参考値) | 勤怠性(参考値) | 柔軟的方略 | プランニング方略 | 作業方略 | | 認知的方略 | 努力調整方略 | 自己効力感 | 勤怠性 | | | | | |
| 個人番号 | 学年 | 組 | 性別 | 鳥取県平均 | 7-A | 1 | 7-C | 1 | -0.2 | 0.1 | 0.0 | 0.2 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | -0.4 | 3.7 | 3.5 | 3.5 | 3.5 | 3.8 | 3.9 | 3.3 | 3.3 |
| | 7 | | 氏名 | 9-A | 3 | 10-A | 3 | -0.4 | 1.0 | 1.0 | -0.5 | 0.3 | -0.3 | 0.9 | -1.2 | 4.0 | 3.5 | 3.8 | 3.3 | 4.5 | 5.0 | 3.5 | 2.0 | |
| | 7 | | 氏名 | 7-A | 0 | 6-B | 2 | -1.0 | -0.5 | -0.8 | 1.8 | -0.5 | -0.9 | -0.4 | -2.0 | 3.9 | 3.5 | 4.0 | 4.3 | 4.5 | 3.8 | 3.6 | 2.0 | |
| | 7 | | 氏名 | 9-B | 4 | 9-C | -1 | -0.9 | 0.0 | -0.8 | -1.0 | 0.5 | -0.5 | 0.4 | -0.9 | 4.1 | 5.0 | 4.3 | 3.3 | 5.0 | 4.5 | 5.0 | 3.5 | |
| | 7 | | 氏名 | 6-C | 2 | 4-B | 3 | -0.2 | 0.6 | -0.3 | 0.8 | 0.0 | 0.5 | -0.4 | 0.5 | 3.1 | 3.0 | 2.8 | 3.3 | 3.0 | 3.0 | 2.6 | 3.2 | |

図2：帳票40加工資料（R4年度岩美北卒業生）

③帳票09の活用

とっとり学力・学習状況調査では、全国学力・学習状況調査と違って実際の問題を使って職員研修等を行うことはできないが、帳票09（図3参照）には問題の概要や出題の趣旨、教科の領域、問題の難易度レベル等を確認することができる。実際に出題された問題がわからなくても、正答率が低かった設問に関する支援の手を十分に打つことができると考える。研修後、課題の見られた分野についての復習プリントを家庭学習として出す等、既習事項の定着を図った。この資料も同じく正答率に応じて色分けを行った。

| 問題番号 | 問題の概要 | 出題の趣旨 | 教科の領域等 | | | 評価の観点 | | | 問題形式 | | 鳥取県 | | 市町村教育委員会 | | 貴校 | | 困難度レベル |
|------|---------------------|-----------------------------------|--------|----|-------|-------|----------|---------------|------|-----|--------|---------|----------|---------|--------|---------|--------|
| | | | 数と計算 | 図形 | 変化と関係 | 知識・技能 | 思考・判断・表現 | 主体的に学習に取り組む態度 | 選択式 | 記述式 | 正答率(%) | 無解答率(%) | 正答率(%) | 無解答率(%) | 正答率(%) | 無解答率(%) | |
| 1(1) | 異分母の分数のたし算を計算する | 異分母の場合でも分数の加法を計算できる | ○ | | | ○ | | | ○ | | 79.4 | 1.7 | | | | | 5-B |
| 1(2) | 整数、小数の足し算、かけ算の計算をする | 加法と乗法の混合した整数と小数の計算をすることができる | ○ | | | ○ | | | ○ | | 40.1 | 2.0 | | | | | 8-B |
| 1(3) | 商が一番大きくなるわり算の式を選ぶ | 除数が1より小さいとき、商が被除数より大きくなることを理解している | ○ | | | ○ | | | ○ | | 60.2 | 0.9 | | | | | 7-C |

図3：帳票09加工資料

④帳票05の活用

本校では今年度から、帳票05を分析研修で活用するだけでなく、昨年度の調査で課題の見られたやり抜く力と向社会性の育成に向け、アンケート全12項目の内、「1.時刻を守る」等の中項目ごとに1つの項目を選び（計6項目）、毎月1回児童アンケートを実施した。また、その結果を児童玄関に掲示（図4参照）したり、アンケート項目を、毎年6年児童が中心となって考える（5年生時に作成）学校生活のきまり「北っ子十か条」の項目と重ねたりすることで、さらなる児童の規範意識の向上を図った。



図4 児童アンケート

2 岩美町分析活用シート「学力調査の分析とその後の取組について」を使用したR-PDCAサイクルの取組

本町全体の取組である岩美町分析活用シート「学力調査の分析とその後の取組について」（図5参照）について紹介する。岩美町3小学校においては、6年間を通して各調査結果を分析・蓄積し、成果と課題を見出し、重点課題、重点目標を決め、重点課題を改善する取組内容及び評価方法を考え、調査の都度、岩美町教育委員会に提出することになっている。

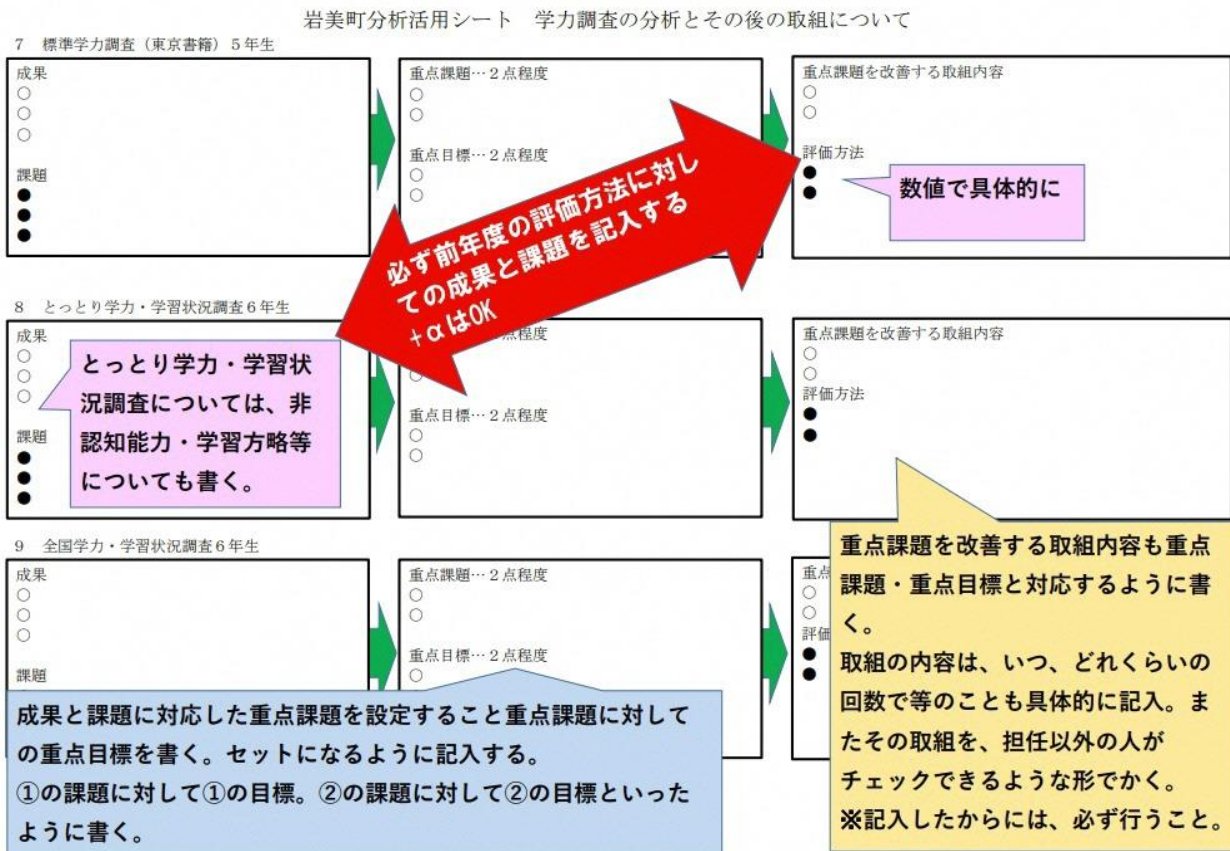


図5：岩美町調査結果分析活用シート記入例

各学年の記入する調査は以下の通りである

| | 全国学力・学習状況調査 4月実施 | とっとり学力・学習状況調査 5月実施 | 標準学力調査 12月実施 |
|-----|---------------------|-----------------------|-----------------|
| 1年生 | | | ○ |
| 2年生 | | | ○ |
| 3年生 | | | ○ |
| 4年生 | | ○ | ○ |
| 5年生 | | ○ | ○ |
| 6年生 | ○ | ○ | ○ |

本校においては、このシートを活用し全職員で調査分析研修会を最低3回は実施している。シートを活用していることで、図6のようなR (Research) -P (Plan) D (Do) C (Check) A (Act) サイクルに年度をまたいで取り組んでいくことができている。

| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|------|----|----|----|-----|----|----|-----|-----|-----|----|-----|----|
| 研修 | | | | ○ | | | ○ | | | | ○ | |
| 全国 | 実施 | | | RPD | | | CA | | | | | |
| とっとり | | 実施 | | | | | RPD | | | | CA | |
| 標準 | | | | CA | | | | | 実施 | | RPD | |

図6 学力調査のR-PDCAサイクル

※全国：全国学力・学習状況調査 とっとり：とっとり学力・学習状況調査

標準：標準学力調査（東京書籍）

※色の濃さはその時点での各プラン（P）の影響力を表す

3. 成果と課題

成果として、研修後の職員へのインタビュー調査では、「一目でこれまでの調査結果を確認できたので、児童理解を深めることができたと思う」、「気になっていた卒業生の様子がわかって良かった」、「大まかではあるが、児童の苦手としている問題の傾向に気付くことができた」等、3つの課題点に関する反応は概ね良いものであったことがあげられる。また、岩美町調査結果分析活用シートについては、作成に多少の時間がかかるものの、今後の取組を考えると同時に、これまでの指導の振り返りや、各調査との関連を意識し指導を継続して行う（R-PDCA）ことができるという肯定的な意見が多く聞かれた。さらに、短期間ではあるが靴そろえの結果を加えてみたことで、それぞれ個々のデータとして扱うのではなく、一覧として見たり、データを蓄積していったりすることで、何かしらの教育効果を見出すことができるのではないかと感じた。その他、活用できるデータとして新体力テストの結果（A～E判定）等が考えられる。

課題としては、分析研修会を通して、自己効力感や努力調整方略の育成に向け、算数科を中心に北小スタンダードの徹底等に取り組んでいくことを決めたが、その取組姿勢に職員間で温度差が見られたことがあげられる。来年度は、理数教科における指導方法工夫改善加配を希望する等、指導者間での取組の差を埋め、全学年を通して北小スタンダードの徹底を図っていくことができる指導体制を整えたいと考える。